

カインの末裔

有島武郎

青空文庫

(一)

長い影を地にひいて、やせうま瘦馬のたづな手綱を取りながら、か彼れは黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包と一緒に、たこ章魚のように頭ばかり大きいあかんぼう赤坊をおぶった彼れの妻は、少しちんば跛脚をひきながら三、四間も離れてその跡からとぼとぼとついて行つた。

北海道の冬は空までせま逼つていた。蝦夷えぞ富士といわれるマツカリヌプリのふもと麓に続くいぶり胆振の大草原を、日本海からうちうらわん内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せるうねり紆濤のように跡から跡から吹き払つていつた。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこごめて風に歯向いながら黙つたまま突立つていた。こんぶだけ昆布岳の斜面に小さく集つた雲の塊を眼がけて日は沈みかかつていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかつた。心細いほどまつすぐ真直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のようにいつまでも黙つて歩いた。馬がいば溺りをする時だけ彼れはふしようぶしよう不性無性にたち立どまつた。妻はその暇にようやく追いついてせなか背の荷をゆすり上げながら

溜息をついた。馬が溺りをすまずと二人はまた黙って歩き出した。

「ここらおやじ（熊の事）が出るぞら」

四里にわたるこの草原の上で、たつた一度妻はこれだけの事をいった。慣れたものには時刻といい、所柄ところがらといい熊の襲来を恐れる理由があつた。彼れはいまいましたように草の中に唾つばを吐き捨てた。

草原の中の道がだんだん太くなって国道に続く所まで来た頃には日は暮れてしまつていた。物の輪郭りんかくが円味まるみを帯びずに、堅いままで黒ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が来た。

着物は薄かつた。そして二人は餓うえ切きつていた。妻は気にして時々赤坊を見た。生きてゐるのか死んでゐるのか、とにかく赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまま黙つていた。

国道の上にはさすがに人影が一人二人動いていた。大抵は市街地に出て一杯飲んでいたので、行違ちがひにしたたか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にえぐられるような渴きと食欲とを覚えて、すれ違つた男を見送つたりしたが、いまいましさに吐き捨てようとする唾はもう出て来なかつた。糊のりのように粘つたものが唇くちびるの合せ

目をとじ付けていた。

内地ならば庚申塚か石地藏でもあるはずの所に、真黒になった一丈もありそうな標
示杭が斜めになつて立つていた。そこまで来ると干魚をやく香がかすかに彼れの鼻を
うつたと思つた。彼れははじめて立停つた。瘦馬も歩いた姿勢をそのままにのそりと動か
なくなつた。鬣と尻尾だけが風に従つてなびいた。

「何んていうだ農場は」

背丈けの図抜けて高い彼れは妻を見おろすようにしてこうつぶやいた。

「松川農場たらいうだが」

「たらいうだ？ 白痴」

彼れは妻と言葉を交わしたのが癪にさわつた。そして馬の鼻をぐんと手綱でしごいてま
た歩き出した。暗らくなつた谷を距てて少し此方よりも高い位の平地に、忘れたように間
をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人氣のない所よりもかえつて自然を淋しく
見せた。彼れはその灯を見るともう一種のおびえを覚えた。人の気配をかぎつけると彼れ
は何んとか身づくろいをしないではいられなかつた。自然さがその瞬間に失われた。それ
を意識する事が彼れをいやが上にも仏頂面にした。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面

をしていやがつて、尻子玉でもひっこぬかれるな」とでもいいような顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帯をしめ直した。良人の顔付きには気も着かないほど眼を落した妻は口をだらりと開けたまま一切無頓着でただ馬の跡について歩いた。

K市街地の町端れには空屋が四軒までならんでいた。小さな窓は鬮體のそのような真暗な眼を往来に向けて開いていた。五軒目には人が住んでいたがうごめく人影の間に囲炉裏の根粗朶がちよろちよろと燃えるのが見えるだけだった。六軒目には蹄鉄屋があった。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじって火花が飛び散っていた。店は熔炉の火口を開いたように明るくて、馬鹿馬鹿しくだだっ広い北海道の七間道路が向側まではつきりと照らされていた。片側町ではあるけれども、とにかく家並があるだけに、強て方向を変えさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鉄屋の前の火の光に照りかえされて濛々と渦巻く姿を見せた。仕事場の鞆の囲りには三人の男が働いていた。鉄砧にあたる鉄槌の音が高く響くと疲れ果てた彼れの馬さえが耳を立てなおした。彼れはこの店先きに自分の馬を引張つて来る時の事を思った。妻は吸い取られるように暖かそうな火の色に見惚れていた。二人は妙にわくわくした心持ちになった。

蹄鉄屋の先きは急に闇が濃かくなつて大抵の家はもう戸じまりをしていた。荒物屋を

兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返つた濁声だみこえがもれる外ほかには、真まつす直ちかな家並は廃村のように寒さの前にちぢこまって、電信柱だけが、けうとい唸りうなを立てていた。彼れと馬と妻とは前の通りに押黙つて歩いた。歩いては時折り思い出したように立停つた。立停つてはまた無意味らしく歩き出した。

四、五町歩いたと思うと彼らはもう町はずれに来てしまつていた。道がへし折られたように曲つて、その先きは、真まつくら闇な窪地に、急な勾配こうばいを取つて下つていた。彼らはその突角とつかくまで行つてまた立停つた。遙か下の方からは、うぎうぎするほど繁り合つた濁葉かつよう樹林じゆりんに風の這入はいる音の外ほかに、シリベシ河のかすかな水の音だけが聞こえていた。

「聞いて見ずに」

妻は寒さに身をふるわしながらこううめいた。

「汝われ聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまつた彼れの声は地の中からでも出て来たようだった。妻は荷をゆりあげて鼻をすすりすすり取つて返した。一軒の家の戸をたた敲いて、ようやく松川農場のありかを教えてもらった時は、彼れの姿を見分けかねるほど遠くに来ていた。大きな声を出す事が何んとなく恐ろしかった。恐ろしいばかりではない、声を出す力さえな

つた。そして跛脚をひきひきまた返つて来た。

彼らは眠くなるほど疲れ果てながらまた三町ほど歩かねばならなかつた。そこに下見したみが、板葺いたぶきの真四角な二階建が外ほかの家並を圧して立っていた。

妻が黙つたまま立留たちどまつたので、彼れはそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほんとうをいうと彼れは始めからこの建物がそれにちがいないと思つていたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまったのだ。もう進退窮きわまつた。彼れは道の向側の立樹たちきの幹に馬を繋いで、燕からすむぎ 麦と雑草とを切りこんだ亜麻袋を鞍輪くらわからほどこいて馬の口にあてがつた。ぼりりぼりりという歯ぎれのいい音がすぐ聞こえ出した。彼れと妻とはまた道を横切つて、事務所の入口の所まで来た。そこで二人は不安らしく顔を見合わせた。妻がぎごちなそうに手を挙げて髪をいじっている間に彼れは思い切つて半分ガラスになつている引戸を開けた。滑車がけたたましい音をたてて鉄の溝すべを滑つた。がたびしする戸ばかりをあつかい慣れている彼れの手の力があまつたのだ。妻がぎよつとするはずみに背せなかの赤坊も眼を覚さまして泣き出した。帳場にいた二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼れと妻とが泣く赤坊の始末もせずのそりと突立っていた。

「何んだ手前てめえたちは、戸を開けつばなしにしくさつて風が吹き込むでねえか。這入るのな

「早く這入つて来う」

紺こんのあつしをセルの前垂れで合せて、櫛かしの角火鉢かくひばちの横座よこざに坐つた男が眉まゆをしかめなが
らこう怒鳴どなつた。人間の顔——殊ことにどこか自分より上手うわてな人間の顔を見ると彼れの心はず
ぐ不貞腐ふてくされるのだった。刃やいばに齒向う獸のように捨鉢すてばちになつて彼れはのさのさと図抜けて
大きな五体を土間に運んで行つた。妻はおずおずと戸を閉しめて戸外に立つていた、赤坊の
泣くのも忘れ果てるほどに氣を転倒させて。

声をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭くちひげの不似合な、長顔の男だった。農民の間
で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るようなものだった。彼れの心は緊張しなが
らもその男の顔を珍らしげに見入らない訳には行かなかつた。彼れは辞儀一つしなかつた。
赤坊が縊くびり殺されそうに戸の外で泣き立てた。彼れはそれにも氣を取られていた。
あがりあがりがままち
上あがり 框かまに腰をかけていたもう一人の男はやや暫しばらく彼れの顔を見つめていたが、浪なにわ
花節はなぶし語りのような妙に張りのある声で突然口を切つた。

「お主は川森さんの縁ゆかりのものじゃないんかの。どうやら顔が似とるじゃが」

今度は彼れの返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場ちやうばさんにも川森から話はないたはずじゃがの。主ぬしがの血筋を岩田が跡に入れてもらいた

いいうてな」

また彼れの方を向いて、

「そうじゃろがの」

それに違いなかった。しかし彼れはその男を見ると虫唾むしずが走った。それも百姓に珍らし
い長い顔の男で、禿はげ上あった額あから左の半面にかけて火傷やけどの跡あとがてらてらと光り、下したまぶ
瞼たが赤くべつかんこをしていた。そして唇くちびるが紙のように薄うすかった。

帳場と呼ばれた男はその事なら飲み込めたという風に、時々上眼うわめで睨にらみ睨にらみ、色々な事
を彼れに聞き糺ただした。そして帳場机の中から、美濃紙みのがみに細こまこま々と活字を刷すつた書類を出し
て、それに広岡仁右衛門にんえもんという彼れの名と生れ故郷とを記入して、よく読んでから判を押
せといつて二通つき出した。仁右衛門（これから彼れという代りに仁右衛門と呼ぼう）は
固もとより明あきめくら盲めくらだったが、農場でも漁場ぎよばでも鉱山でも飯を食うためにはそういう紙の端に
盲判を押さなければならぬという事は心得ていた。彼れは腹がけの井どんぶりの中を探り廻まわし
てぼろぼろの紙の塊かたまりをつかみ出した。そして笥たけのこの皮を剥はぐように幾枚もの紙を剥はがすと真
黒になつた三文判がころがり出た。彼れはそれに息気いきを吹きかけて証書あなに孔あなのあくほど押
しつけた。そして渡された一枚を判と一緒に井の底にしまつてしまつた。これだけの事で

飯の種にありつけるのはありがたい事だった。戸外では赤坊がまだ泣きやんでいなかった。「俺ら銭おぜにこ一文も持たねえからちよつぱり借りたのだが」

赤坊の事を思うと、急に小銭がほしくなつて、彼れがこういい出すと、帳場は呆あきれたように彼れの顔を見詰めた、——こいつは馬鹿な面つらをしているくせに油断のならない横紙破りだと思ひながら。そして事務所では金の借貸は一切しないから縁者になる川森からでも借りるがいいし、今夜は何しろ其所そこに行つて泊めてもらえと注意した。仁右衛門はもう向む腹かつぽうを立ててしまつていた。黙りこくつて出て行こうとすると、そこに居合どわせた男が一緒に行つてやるから待てととめた。そういわれて見ると彼れは自分の小屋が何所どこにあるのかを知らなかつた。

「それじゃ帳場さん何分宜よろしゆう頼むがに、塩梅あんばいよう親方の方にもいうてな。広岡さん、それじゃ行くべえかの。何とまあ孩児ややの痛ましくさかぶぞい。じゃまあおやすみ」

彼れは器用に小腰をかがめて古い手提鞆てさげかばんと帽子とを取上げた。裾すそをからげて砲兵の古靴ふるくつをはいている様子は小作人というよりも雑穀屋の鞆取さやとりだった。

戸を開けて外に出ると事務所のボンボン時計が六時を打つた。びゆうびゆうと風は吹き募つつていた。赤坊の泣くのに困こまじ果はてて妻はぼつりと淋しみしそうに玉蜀黍とうきび殻の雪囲いの影に

立っていた。

足場が悪いから気を付けろといいながら彼の男は先きに立って国道から畦道あぜみちに這入はいって行った。

大瀧おおなみのようなうねりを見せた収穫後の畑地は、広く遠く荒涼として拵ひろがっていた。眼を遮さえぎるものは葉を落した防風林の細長い木立ちだけだった。ぎらぎらと瞬またたく無数の星は空の地を殊更ことごとら寒く暗いものにしていた。仁右衛門を案内した男は笠井という小作人で、天理教の世話人もしているのだといって聞かせたりした。

七町も八町も歩いたと思うのに赤坊はまだ泣きやまなかった。縊くびり殺されそうな泣き声が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行った。

やがて畦道あぜみちが二つになる所で笠井は立停った。

「この道をな、こう行くと左手にさえて小屋が見えようがの。な」

仁右衛門は黒い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添えて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募っていた。笠井はくどくどとそこに行き着く注意を繰返して、しまいに金が要いるなら川森の保証で少し位は融通すると付加えるのを忘れなかった。しかし仁右衛門は小屋の所在が知れると跡は聞いていなかった。餓えと寒

さがひしひしと答え出してがたがた身をふるわしながら、挨拶一つせずにきつきと別れて歩き出した。

玉蜀黍殻とうきびがらといたどりの茎で囲いをした二間半四方ほどの小屋が、前のめりにかしいで、海月くらげのような低い勾配こうばいの小山の半腹に立っていた。物の饅すえた香と積肥つみこえの香ほしいままが撞つにただよっていた。小屋の中にはどんな野獣が潜ひそんでいるかも知れないような気味悪さがあった。赤坊の泣き続ける暗闇の中で仁右衛門が馬の背からどすんと重いものを地面に卸おろす音がした。瘦馬は荷が軽くなるうつつせきと鬱積うつつせきした怒りを一時にぶちまけるように嘶いなないた。遙かの遠くでそれに応こたえた馬があった。跡は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんだ手で荷物を提さげながら小屋に這入った。永く火の気は絶えていても、吹きさらしから這入るとさすがに気持ちよく暖あたたかかった。二人は真暗な中を手さぐりであり合せの古ふるむしろ蓆わらや藁わらをよせ集めてどつかと腰こしを据すえた。妻は大きな溜息ためいきをして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取った。乳房ちちうでをあてがって見たが乳は枯れていた。赤坊は堅くなりかかった齒齲はぐきでいやというほどそれを噛かんだ。そして泣き募った。

「腐くされ孩子にが！ 乳首ちちうで食たいちぎるに」

妻は慳けん貪どんにこういつて、懐ふとこから塩煎餅しおせんべいを三枚出して、ぽりぽりと噛みくだいては赤

坊の口にあてがった。

「俺らにも越せ」

いきなり仁右衛門が猿臂を延ばして残りを奪い取ろうとした。二人は黙ったまままで本気に争った。食べるものといつては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴」

吐き出すように良人がこういつた時勝負はきまっていた。妻は争い負けて大部分を掠奪されてしまった。二人はまた押黙つて闇の中で足しない食物を貪り喰つた。しかしそれは結局食欲をそそる媒介になるばかりだった。二人は喰い終つてから幾度も固唾を飲んで火種のない所では南瓜を煮る事も出来なかつた。赤坊は泣きづかれに疲れてほっぽり出されたままに何時の間にか寝入っていた。

居鎮まつて見ると隙間も風は刃のように鋭く切り込んで来ていた。二人は申合せたように両方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱寝をしながら藁の中でがつがつと震えていた。しかしやがて疲労は凡てを征服した。死のような眠りが三人を襲った。

遠慮会釈もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のような闇が大河の如く東へ東へと流れた。マツカリヌプリの絶巔の雪だけが燐光を放つてかすかに光っていた。荒

らくれた大きな自然だけがそこに甦よみがえつた。

こうして仁右衛門夫婦は、何処どこからともなくK村に現われ出て、松川農場の小作人になつた。

(二)

仁右衛門の小屋から一町ほど離れて、K村から俱知安くつちやんに通う道路みちぞ添いに、佐藤与十という小作人の小屋があつた。与十という男は小柄で顔色も青く、何年たつても齡としをとらないで、働かきも甲斐かいなそうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だつた。あすこの鼻かかあは子種をよそから貰もらつてでもいるんだらうと農場の若い者などが寄ると戯談じやうだんを言い合つた。女房と言うのは体のがっしりした酒喰さけくらいの女だつた。大人数のために稼かせいでも稼かせいでも貧乏ひんぱんしているのだら、だらしない汚い風はしていたが、その顔付きは割合に整つていて、不思議に男に逼せまる淫蕩いんとうな色いろを湛たえていた。

仁右衛門がこの農場に這入はいつた翌朝早く、与十の妻は袷あわせ一枚にぼろぼろの袖無そでなしを着て、井戸——といつても味噌樽みそだるを埋めたのに赤鏽あかさびの浮いた上層水うわみずが四分目ほど溜ためつてる——

の所でアネチヨコといひ慣わされた舶来の雑草の根に出来る薯を洗っていると、そこに一人の男がのそりとやって来た。六尺近い背丈を少し前こごみにして、營養の悪い土気色の顔が真直に肩の上に乗っていた。当惑した野獸のようで、同時に何所か奸譎い大きな眼が太い眉の下でぎろぎろと光っていた。それが仁右衛門だった。彼れは与十の妻を見ると一寸ほほえましい気分になつて、

「おつかあ、火種べあつたらちよつぴり分けてくれずに」

といった。与十の妻は犬に出遇つた猫のような敵意と落着きを以て彼れを見た。そして見つめたままで黙っていた。

仁右衛門は脂のつまつた大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、

「俺らあすこの小屋さ来たもんだのし。乞食ではねえだよ」

といつてにこにこした。罪のない顔になつた。与十の妻は黙つて小屋に引きかえしたが、真暗な小屋の中に臥乱れた子供を乗りこえ乗りこえ囲炉裡の所に行つて粗朶を一本提げて出て来た。仁右衛門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。そして何か一言二言話しあつて小屋の方に歸つて行つた。

この日も昨夜の風は吹き落ちていかなかった。空は隅から隅まで底気味悪く晴れ渡つてい

た。そのために風は地面にばかり吹いているように見えた。佐藤の畑はとにかく秋耕あきおこしをすましていたのに、それに隣となった仁右衛門の畑は見渡す限りかまどがえしとみずひきとあかざととびつかとで茫々ぼうぼうとしていた。ひき残された大豆の殻からが風に吹かれて瓢軽ひょうきんな音を立てていた。あちこちにひよろひよると立った白樺しろかばはおおかた葉をふるい落してなよなよとした白い幹が風にたわみながら光っていた。小屋の前の亜麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い茎が青い色を見せていた。跡は小屋も畑も霜のために白茶けた鈍い狐色きつねいろだった。仁右衛門の淋しい小屋からはそれでもやがて白い炊煙がかすかに漏れはじめた。屋根からともなく囲いからともなく湯気のように漏れた。

朝食をすますと夫婦は十年も前から住み馴なれているように、平気な顔で畑に出かけて行った。二人は仕事の手配もきめずに働いた。しかし、冬を眼の前にひかえて何を先きにするにせよ二人ながら本能のように知っていた。妻は、模様も分らなくなった風呂敷ふろしきを三角に折って露西亞人ロシアじんのように頬ほおかむりをして、赤坊を背中に背負いこんで、せつせと小枝や根っこを拾った。仁右衛門は一本の鋏くわで四町にあまる畑の一隅から掘り起しはじめた。外の小作人は野良仕事のらに片をつけて、今は雪ゆき囲こいをしたり薪を切ったりして小屋のまわりで働いていたから、畑の中に立っているのは仁右衛門夫婦だけだった。少し高い所から

は何処までも見渡される広い平坦な耕作地の上で二人は巢に帰り損ねた二匹の蟻のようにきりきりと働いた。果敢ない労力に句点をうって、鋤の先きが日の加減でぎらつきらつと光った。津波のような音をたてて風のこもる霜枯れの防風林には鳥もいかなかった。荒れ果てた畑に見切りをつけて鮭の漁場にでも移って行ってしまったのだろう。

昼少しまわった頃仁右衛門の畑に二人の男がやって来た。一人は昨夜事務所にいた帳場だった。今一人は仁右衛門の縁者という川森爺さんだった。眼をしょぼしょぼさせた一徹らしい川森は仁右衛門の姿を見ると、怒ったらしい顔付をせずかかとその傍によって行つた。

「汝や辞儀一つ知らねえ奴の、何条いうて俺らには来くさらぬ。帳場さんのう知らしてくさずば、いつまでも知んようもねえだった。先ずもって小屋さ行ぐべし」

三人は小屋に這入った。入口の右手に寝藁を敷いた馬の居所と、皮板を二、三枚ならべた穀物置場があつた。左の方には入口の掘立柱から奥の掘立柱にかけて一本の丸太を土の上にわたして土間に麦藁を敷きならしたその上に、所々蓆が拵けてあつた。その真中に切られた囲炉裡にはそれでも真黒に煤けた鉄瓶がかかかっていて、南瓜のこびりついた欠椀が二つ三つころがっていた。川森は恥じ入る如く、

「やばつちい所で」

といいながら帳場を炉の横座よしぎに招じた。

そこに妻もおずおずと這入つて来て、恐る恐る頭を下げた。それを見ると仁右衛門は土間に向けてかつと唾を吐いた。馬はびくんとして耳をたてたが、やがて首をのばしてその香をかいだ。

帳場は妻のさし出す白湯さゆの茶碗を受けはしたがそのまま飲まずに蓆の上に置いた。そしてむずかしい言葉で昨夜の契約書の内容をいい聞かし初めた。小作料は三年ごとに書換えの一反歩二円二十銭である事、滞納には年二割五分の利子を付する事、村税は小作に割宛てる事、仁右衛門の小屋は前の小作から十五円で買つてあるのだから来年中に償還すべき事、さくあと作跡は馬うまおこし耕して置くべき事、亜麻は貸付地積の五分の一以上作つてはならぬ事、ぼくち博奕をしてはならぬ事、隣保助けねばならぬ事、豊作にも小作料は割増しをせぬ代りどんな凶作でも割引は禁ずる事、場主に直訴じきそがましい事をしてはならぬ事、りやくだつ掠奪農業をしてはならぬ事、それから云々、それから云々。

仁右衛門はいわれる事がよく飲み込めはしなかったが、腹の中では糞くそを喰くらえと思いなから、今まで働いていた畑を気にして入口から眺めていた。

「お前は馬を持つてるくせに何んだって馬耕をしねえだ。幾日もなく雪になるだに」
帳場は抽象論から實際論に切込んで行つた。

「馬はあるが、プラオがねえだ」

仁右衛門は鼻の先きであしらつた。

「借りればいいでねえか」

「銭子がねえかな」

会話はぷつんと途切れてしまつた。帳場は二度の会見でこの野蛮人をどう取扱わねばならぬかを飲み込んだと思つた。面と向つて埒のあく奴ではない。うっかり女房にでも愛想を見せれば大事になる。

「まあ辛抱してやるがいい。ここの親方は函館の金持ちで物の解つた人だかな」

そういつて小屋を出て行つた。仁右衛門も戸外に出て帳場の元氣そうな後姿を見送つた。川森は財布から五十錢銀貨を出してそれを妻の手に渡した。何しろ帳場につけとどけをして置かないと万事に損が行くから今夜にも酒を買つて挨拶に行くがいいし、プラオなら自分の所のを借してやるといつていた。仁右衛門は川森の言葉を聞きながら帳場の姿を見守つていたが、やがてそれが佐藤の小屋に消えると、突然馬鹿らしいほど深い嫉妬が頭

を襲つて来た。彼れはかつと喉をからして痰を地べたにいやというほどはきつけた。

夫婦きりになると二人はまた別々になつてせつせと働き出した。日が傾きはじめると寒さは一入に募つて来た。汗になつた所々は氷るように冷たかつた。仁右衛門はしかし元氣だつた。彼れの真闇な頭の中の一段高い所とも覺しいあたりに五十錢銀貨がまんまるく光つて如何しても離れなかつた。彼れは鍬を動かしながら眉をしかめてそれを払い落そうと試みた。しかしいくら試みても光つた銀貨が落ちないのを知ると白痴のようになつたりと独笑いを漏していた。

昆布岳の一角には夕方になるとまた一叢の雲が湧いて、それを目がけて日が沈んで行つた。

仁右衛門は自分の耕した畑の広さを一わたり満足そうに見やつて小屋に歸つた。手ばしこく鍬を洗い、馬糧を作つた。そして鉢巻の下にじんだ汗を袖口で拭つて、炊事にかかつた妻に先刻の五十錢銀貨を求めた。妻がそれをわたすまでには二、三度横面をなぐられねばならなかつた。仁右衛門はやがてぶらりと小屋を出た。妻は独りで淋しく夕飯を食つた。仁右衛門是一片の銀貨を腹がけの井に入れて見たり、出して見たり、親指で空に弾き上げたりしながら市街地の方に出懸けて行つた。

九時——九時といえは農場では夜更よふけだ——を過ぎてから仁右衛門はいい酒機嫌で突然佐藤の戸口に現われた。佐藤の妻も晩酌に酔いしれていた。与十と鼎座ていざになつて三人は囲炉裡をかこんでまた飲みながら打解けた馬鹿話をした。仁右衛門が自分の小屋に着いた時には十一時を過ぎていた。妻は燃えかすれる囲炉裡火に背を向けて、綿のはみ出た蒲団ふとんを柏かしわに着てぐつすり寝込んでいた。仁右衛門は悪戯いたずらもの者らしくよろけながら近寄つてわつといつて乗りかかるように妻を抱きすくめた。驚いて眼を覚した妻はしかし笑いもしなかつた。騒ぎに赤坊が眼をさました。妻が抱き上げようとすると、仁右衛門は遮りさえぎとめて妻を横抱きに抱きすくめてしまつた。

「そうれまんだ肝きもべ焼けるか。こう可愛めんこがられても肝べ焼けるか。可愛めんこい獣物けだものぞい汝われは。見いんまずに。今いまにな俺おら汝おに絹の衣装いんまべて着せてこすぞ。帳場の和郎わろ（彼かれは所しきらわす唾つばをはいた）が寝言いんまべこく暇あひまに、俺おら親方おやぢと膝ひざつきあわして話して見せるかな。白痴こけめ奴やつ。俺おらが事誰れ知るもんで。汝わりや可愛めんこいぞ。心こころから可愛めんこいぞ。宜よし。宜よし。汝わりやこれ嫌きらいでなかんべさ」

といいながら懐へから折木へぎに包つつんだ大福おほふくを取出して、その一つをぐちやぐちやに押しつぶして息気いきのつまるほど妻の口にあてがっていた。

(三)

から風の幾日も吹きぬいた挙句あげくに雲が青空をかき乱しはじめた。霽みぞれと日の光とが追いつ追われつして、やがて何所どこからともなく雪が降るようになった。仁右衛門の畑はそうなるまでに一部分しか糶すきおこ起されなかつたけれども、それでも秋播小麦あきまきを播まきつけるだけの地積は出来た。妻の勤労のお蔭かげで一冬分ひとふゆぶんの燃料にも差さ支しつかえない準備は出来た。唯ただ困るのは食料だった。馬の背に積んで来ただけでは幾日分の足たしにもならなかつた。仁右衛門はある日馬を市街地に引いて行って売り飛ばした。そして麦あわと粟あわと大豆とをかなり高い相場で買つて帰らねばならなかつた。馬がないので馬車追いにもなれず、彼れは居食いぐいをして雪が少し硬くなるまでぼんやりと過すごしていた。

根雪ねゆきになると彼れは妻子を残して木樵きせりに出かけた。マツカリヌプリの麓ふもとの払はらいさげ下官林にしんぼうかせに入りこんで彼れは骨身を惜まず働いた。雪が解けかかると彼れは岩内いわないに出て鱧場稼にしんぼうかせぎをした。そして山の雪が解けてしまう頃に、彼れは雪焼けと潮焼けで真黒になつて帰つて来た。彼れの懐は十分重かつた。仁右衛門は農場に帰るとすぐ遅たくましい一頭の馬と、プラ

オと、ハーローと、必要な種子たねを買い調えた。彼れは毎日毎日小屋の前に仁王立におうだちになつて、五カ月間積り重なつた雪の解けたために膿み放題に膿うんだ畑から、恵深い日の光に照らされて水蒸気の濛々もうもうと立上る様を待ち遠しげに眺めやつた。マツカリヌプリは毎日紫色に暖かく霞かすんだ。林の中の雪の叢消むらぎえの間には福寿草ふくじゆそうの茎が先ず緑をつけた。つぐみとしじゅうからとが枯枝をわたつてしめやかなささ啼なきを伝えはじめた。腐るべきものは木の葉といわず小屋といわず存分に腐つていた。

仁右衛門は眼路めじのかぎりに見える小作小屋の幾軒かを眺めやつて糞くそでも喰くらえと思つた。未来の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年経たつた後には彼れは農場一の大小作おおこさくだった。五年の後には小さいながら一箇の独立した農民だった。十年目にはかなり広い農場を譲り受けていた。その時彼れは三十七だった。帽子を被つて二重マントを着た、護謨ゴム長靴ながぐつびきの彼れの姿が、自分ながら小恥こはずかしいように想像された。

とうとう播種たねまき時ときが来た。山火事で焼けた熊笹くまざさの葉が真黒にこげて奇跡の護符まじないのように何所どこからともなく降つて来る播種時たねまきが来た。畑の上は急に活気いきだった。市街地にも種物たねもの商や肥料商が入込んで、たつた一軒の曖昧屋ごげやからは夜ごとに三味線の遠音とわねが響くようになった。

仁右衛門は遅しい馬に、磨ぎすましたプラオをつけて、畑におりたつた。耒き起される土壤は適度の湿気をもつて、裏返るにつれてむせるような土の香を送った。それが仁右衛門の血にぐんぐんと力を送つてよこした。

凡てが順当に行つた。播いた種は伸をするようにずんずん生い育つた。仁右衛門はあたり近所の小作人に対して二言目には喧嘩面を見せたが六尺ゆたかの彼れに楯つくものは一人もなかつた。佐藤なんぞは彼れの姿を見るとこそこそと姿を隠した。「それ『まだか』が来おつたぞ」といつて人々は彼れを恐れ憚つた。もう顔がありそんなものだと見上げて、まだ顔はその上の方にあるというので、人々は彼れを「まだか」と譚名していたのだ。時々佐藤の妻と彼れとの関係が、人々の噂に上るようになった。

一日働き暮すとさすが労働に慣れ切つた農民たちも、眼の廻るようなこの期節の忙しさに疲れ果てて、夕飯もそこそこに寝込んでしまつたが、仁右衛門ばかりは日が入つても手が痒くてしようがなかつた。彼れは星の光をたよりに野獣のように畑の中で働き廻わつた。夕飯は囲炉裡の火の光でそこそこにしたためた。そうしてはぶらりと小屋を出た。そして農場の鎮守の社の傍の小作人集会所で女と会つた。

鎮守は小高い密樹林の中にあつた。ある晩仁右衛門はそこで女を待ち合わしていた。風も吹かず雨も降らず、音のない夜だつた。女の来ようは思いの外早い事も腹の立つほどおそい事もあつた。仁右衛門はだだつ広い建物の入口の所で膝をだきながら耳をそばだてていた。

枝に残つた枯葉が若芽にせきたてられて、時々かさつと地に落ちた。天鷲絨のように滑かな空気は動かないままに彼れをいたわるように押包んだ。荒くれた彼れの神経もそれを感じない訳には行かなかつた。物なつかしいようななごやかな心が彼れの胸にも湧いて来た。彼れは闇の中で不思議な幻覚に陥りながら淡くほほえんだ。

足音が聞こえた。彼れの神経は一時に叢立つた。しかしやがて彼れの前に立つたのはたしかに女の形ではなかつた。

「誰れだ汝や」

低かつたけれども闇をすかして眼を据えた彼れの声は怒りに震えていた。

「お主こそ誰れだと思つたら広岡さんじやな。何んしに今時こないな所にいるのぞい」

仁右衛門は声の主が笠井の四国猿奴だと知るとかつとなつた。笠井は農場一の物識りで金持だ。それだけで癩癩の種には十分だ。彼れはいきなり笠井に飛びかかつて胸

倉をひつつかんだ。かーっといつて出した唾を危くその面に吐きつけようとした。

この頃浮浪人が出て毎晩集会所に集つて焚火などをやるから用心が悪い、と人々がいうので神社の世話役をしていた笠井は、おどかしつけるつもりで見廻りに来たのだった。彼れは固より櫛の棒位の身じたくはしていたが、相手が「まだか」では口もきけないほど縮んでしまった。

「汝や俺らが媾曳の邪魔べくく気だな、俺らがする事に汝が手だしはいんねえだ。首ねつこべひんぬかれんな」

彼れの言葉はせき上る息気の間押しひしやげられてがらがら震えていた。

「そりや邪推じゃがなお主」

と笠井は口早にそこに来合せた仔細と、丁度いい機会だから折入って頼む事がある旨をいいたした。仁右衛門は卑下して出た笠井にちよつと興味を感じて胸倉から手を離して、闕に腰をすえた。暗闇の中でも、笠井が眼をきよとんとさせて火傷の方の半面を平手で撫でまわしているのが想像された。そしてやがて腰を下して、今までの慌てかたにも似ず悠々と煙草入を出してマッチを擦った。折入って頼むといったのは小作一同の地主に対する苦情に就いてであつた。一反歩二円二十銭の畑代はこの地方にない高相場であるのに、

どんな凶年でも割引をしないために、小作は一人として借金をしていないものはない。金では取れないと見ると帳場は立毛たちげの中に押収うちしてしまう。従って市街地の商人からは眼飛び出るような上うわまえ前まえをはねられて食くい代しろを買わねばならぬ。だから今度地主が来たら一同では非とも小作料の値下を要求するのだ。笠井はその総代になっているのだが一人では心細いから仁右衛門も出て力になつてくれといふのであつた。

「白痴こけなことこくなてえば。二両二貫が何高たか値かいべ。汝われたちが骨ほね節ぶしは稼かせぐようには造つてねえのか。親方には半文の借りもした覚えはねえからな、俺らその公事くじには乗んねえだ。汝われ先まへず親方になつて見べし。ここのがよりも欲にかかるべえに。……芸うもねえ事ことに可愛めんこくもねえ面つらつんだすなてば」

仁右衛門はまた笠井のてかてかした顔に唾をはきかけた衝動にさいなまれたが、我慢してそれを板の間にはき捨てた。

「そうまあ一概にはいうもんでないぞい」

「一概にいつたが何条なじょう悪いだ。去いね。去いねべし」

「そういえど広岡さん……」

「汝わりや拳固げんここと喰くらいていがか」

女を待ちうけている仁右衛門にとっては、この邪魔者の長居しているのがいまいましいので、言葉も仕打ちも段々荒らかになつた。

執着の強い笠井も立なければならなくなつた。その場を取りつくろう世辞をいって怒つた風も見せずに坂を下りて行つた。道の二股になつた所で行こうとすると、闇をすかしていた仁右衛門は吼えるように「右さ行くだ」と厳命した。笠井はそれにも背かなかつた。左の道を通つて女が通つて来るのだ。

仁右衛門はまた独りになつて闇の中にうずくまつた。彼れは憤りにぶるぶる震えていた。生憎女の来ようがおそかつた。怒つた彼れには我慢が出来きらなかつた。女の小屋に荒れこむ勢で立上ると彼れは白昼大道を行くような足どりで、藪道をぐんぐん歩いて行つた。ふとある疎藪の所で彼れは野獣の敏感さを以て物のけはいを嗅ぎ知つた。彼れはたと立停つてその奥をすかして見た。しんとした夜の静かさの中で悪諺うような淫らな女の潜み笑いが聞こえた。邪魔の入つたのを気取つて女はそこに隠れていたのだ。嗅ぎ慣れた女の臭いが鼻を襲つたと仁右衛門は思つた。

「四つ足めが」

叫びと共に彼れは疎藪の中に飛びこんだ。とげとげする触感が、寝る時のほか脱いだ事

のない草鞋わらじの底に二足三足感じられたと思うと、四足目は軟いむっちりした肉体を踏みつけた。彼れは思わずその足の力をぬこうとしたが、同時に狂暴な衝動に駈かられて、満身の重みをそれに托たくした。

「痛い」

それが聞きたかったのだ。彼れの肉体は一度に油をそそぎかけられて、そそり立つ血のきおいに眼がくるめいた。彼れはいきなり女に飛びかかつて、所きらわず殴つたり足蹴あしげにしたりした。女は痛いといつづけながらも彼れにからまりついた。そして噛かみついた。彼れはどうとう女を抱きすくめて道路に出た。女は彼れの顔に鋭く延びた爪をたてて逃れようとした。二人はいがみ合う犬のように組み合つて倒れた。倒れながら争つた。彼れはどうとう女を取逃がした。はね起きて追いかかると一目散に逃げたと思つた女は、反対に抱きついて来た。二人は互に情に堪えかねてまた殴つたり引搔ひっかいたりした。彼れは女のたぶさを掴つかんで道の上をずるずる引張つて行つた。集会所に来た時は二人とも傷だらけになつていた。有頂天になつた女は一塊の火の肉となつてぶるぶる震えながら床の上につぶ倒れていた。彼れは闇の中に突つ立ちながら焼くような昂こうふん奮のためによろめいた。

春の天氣の順当であつたのに反して、その年は六月の初めから寒氣と淫雨いんうとが北海道を襲つて来た。早魃かんぱつに饑饉ききんなしといひ慣わしたのは水田の多い内地の事で、畑ばかりのK村などは雨の多い方はまだ仕やすいとしたものだが、その年の長雨には溜息もらを漏さない農民はなかつた。

森も畑も見渡すかぎり真青になつて、掘立小屋ほつたてしやばかりが色を変えずに自然をよごしていた。時雨しぐれのような寒い雨が閉ざし切つた鈍色にびいろの雲から止途とめどなく降りそそいだ。低味ひくみの畦あ道ぜみちに敷ならばたスリツパ材はぶかぶかと水のために浮き上つて、その間から真菰まこもが長く延びて出た。蝸斗おたまじやくしが畑の中を泳ぎ廻つたりした。郭公ほととぎすが森の中で淋しく啼ないた。小豆あずきを板の上に遠くでころがすような雨の音が朝から晩まで聞えて、それが小休おやむと湿氣あずきを含んだ風が木でも草でも萎しぼましそうに寒く吹いた。

ある日農場主が函館はこだてから来て集会所で寄合うという知らせが組長から廻つて来た。仁右衛門はそんな事には頓着とんじやくなく朝から馬力ばりきをひいて市街地に出た。運送店の前にはもう二台の馬力があつて、脚をつまだてるようにしよんぼりと立つ輓馬ひきうまの鬣たてがみは、幾本かの

鞭を下げたように雨によれて、その先きから水滴が絶えず落ちていた。馬の背からは水蒸気が立昇った。戸を開けて中に這入ると馬車追いを内職にする若い農夫が三人土間に焚火をしてあたっていた。馬車追いをする位の農夫は農夫の中でも冒険的な気の荒い手合だった。彼らは顔にあたる焚火のほてりを手や足を挙げて防ぎながら、長雨につけこんで村に這入って来た博徒の群の噂をしていた。捲き上げようとして這入り込みながら散々手を焼いて駅亭から追い立てられているような事もいった。

「お前も一番乗って儲かれや」

とその中の一人は仁右衛門をけしかけた。店の中はどんよりと暗く湿っていた。仁右衛門は暗い顔をして唾をはき捨てながら、焚火の座に割り込んで黙っていた。ぴしやぴしやと気疎い草鞋の音を立てて、往來を通る者がたまさかにあるばかりで、この季節の賑い立つた様子は何処にも見られなかった。帳場の若いものは筆を持った手を頬杖にして居眠っていた。こうして彼らは荷の来るのをぼんやりして二時間あまりも待ち暮した。聞くに堪えないような若者どもの馬鹿話も自然と陰気な気分を押えつけられて、動ともすると、沈黙と欠伸が拵がった。

「一はたりはたらずに」

突然仁右衛門がそういつて一座を見廻した。彼れはその珍らしい無邪気な微笑をほほえんでいた。一同は彼れのにこやかな顔を見ると、吸い寄せられるようになって、いう事をきかないではいられなかつた。蓆むしろが持ち出された。四人は車座くるまざになつた。一人は気軽に若い者の机の上から湯呑茶碗を持つて来た。もう一人の男の腹がけの中からは骰子さいが二つ取出された。

店の若い者が眼をさまして見ると、彼らは昂奮こうふんした声を押しつぶしながら、無気むきになつて勝負に耽ふけつていた。若い者は一寸誘惑ちよつとを感じたが氣を取直して、

「困るでねえか、そうした事店頭みせさきでおつ広ひろげて」といふと、

「困つたら積荷ここと探して来う」と仁右衛門は取り合わなかつた。

昼になつても荷の回送はなかつた。仁右衛門は自分からいい出しながら、面白くない勝負ばかりしていた。何方どっちに変わるか自分でも分らないような氣分が、驀まつしぐら地に悪い方に傾いて来た。氣を腐らせれば腐らすほど彼れのやまは外れてしまった。彼れはくさくさしてふいと座を立つた。相手が何とかいうのを振向きもせず店を出た。雨は小休おやみなく降り続け

ていた。昼餉ひるげの煙が重く地面の上を這はっていた。

彼れはむしゃくしゃしながら馬力を引ばつて小屋の方に帰つて行つた。だらしなく降りつづける雨に草木も土もふやけ切つて、空までがぼりと地面の上に落ちて来そうにだらけていた。面白くない勝負をして焦立いらだつた仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮え切きらない景色だった。彼れは何か思い切つた事をしてでも胸をすかせたく思った。丁度自分の畑の所まで来ると佐藤の年嵩としかさの子供が三人学校の帰途かえりと見えて、荷物を斜はすに背中に背負つて、頭からぐつしより濡れながら、近路ちかみちするために畑の中を歩いていた。それを見ると仁右衛門は「待て」といつて呼びとめた。振り向いた子供たちは「まだか」の立っているのを見ると三人とも恐ろしさに顔の色を変えてしまった。殴りつけられる時するように腕をまげて目八分の所にやつて、逃げ出す事もし得ないでいた。

「童子連わらしづれは何条なじよういうて他人ひとの畑はたけさ踏み込んだ。百姓の餓鬼がきだに畑のう大事がる道知んねえだな。来こう」

仁王立におうたちになつて睨にらみすえながら彼れは怒鳴どなつた。子供たちはもうおびえるように泣き出しながら恐おず恐おず仁右衛門の所に歩いて来た。待ちかまえた仁右衛門の鉄拳はいきなり十二ほどになる長女の瘦やせた頬ほおをゆがむほどたたきつけた。三人の子供は一度に痛みを感じ

じたように声を挙げてわめき出した。仁右衛門は長幼の容捨なく手あたり次第に殴りつけた。

小屋に帰ると妻は蓆の上にペツたんこに坐つて馬にやる藁をざくりざくり切つていた。赤坊はいんちの中で章魚のような頭を檻樓から出して、軒から滴り落ちる雨垂れを見やつていた。彼れの気分にあさわな重苦しさが漲つて、運送店の店先に較べては何から何まで便所のように穢かつた。彼は黙つたままで唾をはき捨てながら馬の始末をするとすぐまた外に出た。雨は膚まで沁み徹つてぞくぞく寒かつた。彼れの癩癩は更らにつつた。彼れはすたすと佐藤の小屋に出かけた。が、ふと集会所に行つてゐる事に気がつくとその足ですぐ神社をさして急いだ。

集会所には朝の中から五十人近い小作者が集つて場主の来るのを待つていたが、昼過ぎまで待ちぼうけを喰わされてしまった。場主はやがて帳場を伴につれて厚い外套を着てやつて来た。上座に坐ると勿体らしく神社の方を向いて柏手を打つて黙拝をしてから、居合わせる者らには半分も解らないような事をして顔にいい聞かした。小作者らはげんな顔をしながらも、場主の言葉が途切れると尤もらしくうなずいた。やがて小作者らの要求が笠井によつて提出せらるべき順番が来た。彼れは先ず親方は親で小作は子だと説

き出して、小作者側の要求をかなり強くい張った跡で、それはしかし無理な御願いだとか、物の解らない自分たちが考える事だからだとか、そんな事は先ず後廻しでもいい事だとか、自分のいい出した事を自分で打壊すような添そえことば言葉を付加えるのを忘れなかった。仁右衛門はちようどそこに行き合せた。彼れは入口の羽目板はめいたに身をよせてじつと聞いていた。

「こうまあ色々とお願ひしたじやからは、お互も心をしめて帳場さんにも迷惑をかけぬだけにはせずばなあ（ここで彼れは一同を見渡した様子だった）。『万国心をあわせてな』と天理教のお歌様にもある通り、定きまった事は定まったようにせんとならんじやが、多い中じやに無理もないようなものの、亜麻などを親方、ぎようさんつけたものもあつて、まこと済まん次第じやが、無理が通れば道理もひっこみよるで、なりませんじやもし」

仁右衛門は場規もかまわず畑の半分を亜麻にしていた。で、その言葉は彼れに対するあてこすりのように聞こえた。

「今日なども顔を出しよらん横道者よこしまものもありますじやで……」

仁右衛門は怒りのために耳がかアんとした。笠井はまだ何か滑らかにしゃべっていた。場主がまだ何か訓示めいた事をいうらしかったが、やがてぎわぎわと人の立つ気配がし

た。仁右衛門は息気を殺して出て来る人々を窺がった。場主が帳場と一緒に、後から笠井に傘をさしかけさせて出て行つた。労働で若年の肉を鍛えたらしい頑丈な場主の姿は、何所か人を憚からした。仁右衛門は笠井を睨みながら見送つた。やや暫らくすると場内から急にくつろいだ談笑の声が上がつた。そして二、三人ずつ何か談り合いながら小作者らは小屋をさして歸つて行つた。やや遅れて伴れもなく出て来たのは佐藤だつた。小さな後姿は若々しくつて青年のようだつた。仁右衛門は木の葉のように震えながらずかずかと近づくと、突然後ろからその右の耳のあたりを殴りつけた。不意を喰つて倒れんばかりによつけた佐藤は、跡も見ずに耳を押えながら、猛獸の遠吠を聞いた兔のように、前に行く二、三人の方に一目散にかけ出してその人々を楯に取つた。

「汝や乞食か盗賊か畜生か。よくも汝が餓鬼どもさ教唆けて他人の畑こと踏み荒したな。殴ちのめしてくれずに。来」

仁右衛門は火の玉のようになつて飛びかかつた。当の二人と二、三人の留男とは毬になつて赤土の泥の中をころげ廻つた。折重なつた人々がようやく二人を引分けた時は、佐藤は何所かしたたか傷を負つて死んだように青くなつていた。仲裁したもののはかかり合いからやむなく、仁右衛門に付添つて話をつけるために佐藤の小屋まで廻り道をした。小

屋の中では佐藤の長女が隅すみの方に丸まって痛い痛いといひながらまだ泣きつづけていた。炬ろうを間に置いて佐藤の妻と広岡の妻とはさし向いに罵り合あつていた。佐藤の妻は安座あぐらをかいて長い火箸ひばしを右手に握にぎつていた。広岡の妻も背に赤ん坊を背負おつて、早口にいい募もつていた。顔を血だらけにして泥まみれになった佐藤の跡から仁右衛門が這入こつて来るのを見ると、佐藤の妻は訳を聞く事もせずにながた震える齒を噛かみ合あせて猿のように唇の間からむき出しながら仁右衛門の前に立ちはだかつて、飛び出しそうな怒りの眼で睨にらみつけた。物がいえなかつた。いきなり火箸を振上げた。仁右衛門は他愛もなくそれを奪い取とつた。噛みつこうとするのを押しつけた。そして仲裁者が一杯飲もうと勧めるのも聴かずに妻を促うして自分の小屋に帰かえつて行いつた。佐藤の妻は素す跣だしのまま仁右衛門の背に罵ののしを浴あせながら怒フユウリ精しのようについて来た。そして小屋の前に立ちはだかつて、囁ささるように半ば夢中で仁右衛門夫婦を罵りつづけた。

仁右衛門は押黙おしだまつたまま炬ろう裡りの横よこ座ざに坐まつて佐藤の妻の狂態を見つめていた。それは仁右衛門には意外の結果だった。彼れの気分は妙にかたづかないものだった。彼れは佐藤の妻の自分から突然離れたのを怒おこつたりおかしく思おもつたり惜おしんだりしていた。仁右衛門が取合あわないので彼女はさすがに小屋の中には這入こらなかつた。そして皸しわ枯がれた声でおめき

叫びながら雨の中を帰って行つてしまつた。仁右衛門の口の辺にはいかにも人間らしい皮肉な歪ゆがみが現われた。彼れは結局自分の智慧ちえの足りなさを感じた。そしてままよと思つていた。

凡すべての興味が全く去つたのを彼れは覺えた。彼れは少し疲れていた。始めて本統ほんとうの事情を知つた妻から嫉妬しつとがましい執拗しつこい言葉でも聞いたら少しの道楽どうらくげ気もなく、どれほどな残酷な事でもやり兼ねないのを知ると、彼れは少し自分の心を恐れねばならなかつた。彼れは妻に物をいう機会を与えないために次から次へと命令を連発した。そして晩おそい昼飯をしたたか喰つた。がらつと箸はしを措おくと泥だらけなびしよぬれな着物のままでまたぶらりと小屋を出た。この村に這入りこんだ博徒とばらの張つていた賭場をさして彼の足はしよう事なしに向いて行つた。

(五)

よくこれほどあるもんだと思わせた長雨も一カ月ほど降り続いて漸ようやく晴れた。一足飛びに夏が来た。何時いつの間に花が咲いて散つたのか、天気になつて見ると林の間にある山桜も、

辛夷こぶしも青々とした広葉になつていた。蒸風呂のような気持ちの悪い暑さが襲つて来て、畑の中の雑草は作物を乗りこえて葎むぐらのように延びた。雨のため傷いためられたに相異ないと、長雨のただ一つの功德くじくに農夫らのいい合つた昆こんちゆう虫も、すさまじい勢で発生した。甘藍キャベツのまわりにはえぞしろちようが夥おびたしく飛び廻つた。大豆だいずにはくちかきむしの成虫がうごうごするほど集まつた。麦類には黒穂の、馬鈴薯ばれいしょにはべと病の徴候が見えた。虻あぶと蝨ぶよとは自然の斥せつこう候こうのようにもやもやと飛び廻つた。濡れたままに積重ねておいた汚れ物をかけたわたした小屋の中からは、あらん限りの農夫の家族が武具えものを持つて畑に出た。自然に齒向う必死な争鬪の幕は開かれた。

鼻歌も歌わずに、汗を肥料のように畑の土に滴らしながら、農夫は腰を二つに折つて地面かじに噛り付いた。耕馬は首を下げられるだけ下げて、乾き切らない土の中に脚を深く踏みこみながら、絶えず尻尾しりつぽで虻を追つた。しゅつと音をたてて襲つて来る毛の束にしたたか打れた虻は、血を吸つて丸くなつたまま、馬の腹からぼとりと地に落ちた。仰向あむむけになつて鋼線はりがねのような脚を伸したり縮めたりして藻掻もがく様さまは命の薄れるもののように見えた。暫しばらくするとしかしそれはまた器用に翅はねを使って起きかえつた。そしてよろよろと草の葉裏しぼらに這いよつた。そして十四、五分の後にはまた翅をはつてうなりを立てながら、眼を射る

ような日の光の中に勇ましく飛び立って行った。

夏物が皆無作というほどの不出来であるのに、亜麻だけは平年作位にはまわった。青天あおビ鷺絨ロードの海となり、瑠璃色るりいろの絨じゅうたんとなり、荒くれた自然の中の姫君なる亜麻の畑はやがて小紋こもんのような果みをその繊細な茎の先きに結んで美しい狐色に変わった。

「こんなには亜麻をつけては仕様しようがねえでねえか。畑が枯れて跡地には何んだって出来はしねえぞ。困るな」

ある時帳場が見廻つて来て、仁右衛門にこういった。

「俺おらも困るだ。汝われが困ると俺らが困るとは困りようが土台ちがわい。口くちが干上ひあがるんだあぞ俺おらののは」

仁右衛門は突慳つっけんどん貪どんにこういい放つた。彼れの前にあるおきては先ず食う事だった。

彼れはある日亜麻の束を見上げるように馬力に積み上げてくつちゃん俱知安の製線所に出かけた。製線所では割合に斤目はかりをよく買つてくれたばかりでなく、他の地方が不作なために結実がなかつたので、亜麻種あまだねを非常な高値たかねで引取る約束をしてくれた。仁右衛門の懐の中には手取り百円の金が暖くしまわれた。彼れは畑にまだしこたま残っている亜麻の事を考えた。彼れは居酒屋に這入はいった。そこにはK村では見られないような綺麗きれいな顔をした女もいた。

仁右衛門の酒は必ずしも彼れをきまつた型には酔わせなかつた。或る時は彼れを怒りつぱく、或る時は悒鬱ゆううつに、或る時は乱暴に、或る時は機嫌よくした。その日の酒は勿論もちろん彼れを上機嫌にした。一緒に飲んでゐるものが利害関係のないのも彼れには心置きがなかつた。彼れは酔うままに大きな声で戯談じやうだんぐち口をきいた。そういう時の彼れは大きな愚かな子供だつた。居合せたものはつり込まれて彼れの周囲に集つた。女まで引張られるままに彼れの膝ひざに倚りかかつて、彼れの頬ほおずりを無邪氣に受けた。

「汝われの頬ほおに俺おらが髭ひげこ生えたらおかしかんべなし」

彼れはそんな事をいつた。重いその口からこれだけの戯談が出ると女なぞは腹をかかえて笑つた。陽ひがかげる頃に彼れは居酒屋を出て反物屋たんものやによつて華手はでなモスリンの端切はぎれを買つた。またビールの小瓶こびんを三本と油糟あぶらかすとを馬車に積んだ。俱知安くつちやんからK村に通う国道はマツカリヌプリの山裾やますその椴松帯とどまつたいの間を縫つていた。彼れは馬力の上に安座あぐらをかいて瓶から口うつしにビールを煽りながら濁歌だみうたをこだまにひびかせて行つた。幾抱いくぶえもある椴松は羊齒しだの中から真直に天を突いて、僅わずかに覗のぞかれる空には昼月が少し光つて見え隠れに眺められた。彼れは遂に馬力の上に酔い倒れた。物慣れた馬は凸凹の山道を上手に拾いながら歩いて行つた。馬車はかしいだり跳ねたりした。その中で彼れは快い夢に入

ったり、面白い現うつつに出たりした。

仁右衛門はふと熟睡から破られて眼をさました。その眼にはすぐ川森爺じいさんの真面目まじめくさつた一徹な顔が写つた。仁右衛門の軽い気分にはその顔が如何いかにもおかしかつたので、彼れは起き上りながら声を立てて笑おうとした。そして自分が馬力の上において自分の小屋の前に来ている事に気がついた。小屋の前には帳場も佐藤も組長の某もいた。それはこの小屋の前では見慣れない光景だつた。川森は仁右衛門が眼を覚ましたのを見ると、

「早はやう内さ行くべし。汝われが嬰子にがはおつ死ぬべえぞ。赤痢さとツつかれただ」

といった。他愛のない夢から一足飛びにこの恐ろしい現実呼びさまされた彼れの心は、最初に彼れの顔を高笑いにくずそうとしたが、すぐ次ぎの瞬間に、彼れの顔の筋肉を一度いちどきにひきしめてしまった。彼れは顔中の血が一時に頭の中に飛び退といたように思った。仁右衛門は酔いが一時に醒さめてしまつて馬力から飛び下りた。小屋の中にはまだ二、三人人がいた。妻はと見ると虫の息に弱つた赤坊の側に蹲うずくまつておいおい泣いていた。笠井が例ふるかはんの古鞆ふるかはんを膝に引つけてその中から護符のようなものを取り出していた。

「お、広岡さんええ所に帰つたぞな」

笠井が逸いちはや早く仁右衛門を見付けてこういうと、仁右衛門の妻は恐れるように怨うらむよう

に訴えるように夫を見返つて、黙つたまま泣き出した。仁右衛門はすぐ赤坊の所に行つて見た。章魚たこのような大きな頭だけが彼れの赤坊らしい唯一ただ一つのものであった。たった半日の中うちにこうも変わるかと疑われるまでにその小さな物は衰え細つていた。仁右衛門はそれを見ると腹が立つほど淋しく心こころ許もとなくなつた。今まで経験した事のないなつかしさ可愛さが焼くように心に逼せまつて来た。彼れは持った事のないものを強いて押付けられたように当惑してしまつた。その押付けられたものは恐ろしく重い冷たいものだつた。何よりも先ず彼れは腹の力の抜けて行くような心持ちをいまましく思つたがどうしようもなかつた。

勿もつたい体ぶつて笠井が護符を押しただき、それで赤坊の腹部を呪じゆもん文を称とえながら撫なで廻まわすのが唯一の力に思われた。傍にいる人たちも奇蹟の現われるのを待つように笠井のする事を見守つていた。赤坊は力のない哀れな声で泣きつづけた。仁右衛門は腸はうわたをむしられるようだった。それでも泣いている間はまだよかつた。赤坊が泣きやんで大きな眼を引つらしたまま瞬まばたきもしなくなると、仁右衛門はおぞましくも拝はげむような眼で笠井を見守つた。小屋の中は人いきれで蒸すように暑かつた。笠井の禿はげ上あがつた額からは汗の玉がたらたらと流れ出た。それが仁右衛門には尊こくさえ見えた。小半こはんとき時赤坊の腹を撫で廻まわすと、笠井はまた古鞆の中から紙包を出して押おしただいた。そして口に手てぬくい拭ぬぐいを喰くわえてそれを開

くと、一寸四方ほどな何か字の書いてある紙片を摘み出して指の先きで丸めた。水を持って来させてそれの中へ浸した。仁右衛門はそれを赤坊に飲ませるとさし出されたが、飲ませるだけの勇氣もなかった。妻は甲斐甲斐しく良人に代った。渴き切っていた赤坊は喜んでそれを飲んだ。仁右衛門は有難いと思っていた。

「わしも子は亡くした覚えがあるので、お主の心持ちはようわかる。この子を助けようと思つたら何せ一心に天理王様に頼まつしやれ。な。合点か。人間業では及ばぬ事じゃでな」
笠井はそういつてしたり顔をした。仁右衛門の妻は泣きながら手を合せた。

赤坊は続けさまに血を下した。そして小屋の中が真暗になった日のくれぐれに、何物にか助けを求める成人のような表情を眼に現わして、あてどもなくそこらを見廻していたが、次第次第に息が絶えてしまった。

赤坊が死んでから村医は巡査に伴れられて漸くやって来た。香奠代りの紙包を持って帳場も来た。提灯という見慣れないものが小屋の中を出たり這入ったりした。仁右衛門夫婦の嗅ぎつけない石炭酸の香は二人を小屋から追出してしまった。二人は川森に付添われて西に廻った月の光の下にしよんぼり立った。

世話に来た人たちは一人去り二人去り、やがて川森も笠井も去ってしまった。

水を打ったような夜の涼しさと静かさとの中にかすかな虫の音がしていた。仁右衛門は何という事なしに妻が癩しかくにさわってたまらなかった。妻はまた何という事なしに良人おっとが憎まれてならなかった。妻は馬力の傍にうずくまり、仁右衛門はあてもなく唾つばを吐き散らしながら小屋の前を行ったり帰ったりした。よその農家でこの凶事があつたら少くとも隣近所から二、三人の者が寄り合つて、買つて出した酒でも飲みちらしながら、何かと話でもして夜を更ふかすのだろう。仁右衛門の所では川森さえ居残っていないのだ。妻はそれを心から淋しく思つてしくしくと泣いていた。物の三時間も二人はそうしたままで何もせずぼんやり小屋の前で月の光にあわれな姿をさらしていた。

やがて仁右衛門は何を思い出したのかのそのそと小屋の中に這入つて行つた。妻は眼角かどを立てて首だけ後ろに廻わして洞穴のような小屋の入口を見返つた。暫しばらくすると仁右衛門は赤坊を背負つて、一丁の鋤くわを右手に提さげて小屋から出て来た。

「ついて来う」

そういつて彼れはすたすたと国道の方に出て行つた。簡単な啼なきごえ声で動物と動物とが互たがを理解し合うように、妻は仁右衛門のしようとする事が呑み込めたらしく、のっそりと立上つてその跡あとに随したがつた。そしてめそめそと泣き続けていた。

夫婦が行き着いたのは国道を十町も俱知安くつちあんの方に来た左手の岡の上にある村の共同墓地だった。その上からは松川農場を一面に見渡して、ルベシベ、ニセコアンの連山も川向いの昆布岳こんぶだけも手に取るようだった。夏の夜の透明な空気は青み亘わたつて、月の光が燐のように凡すべての光るものの上に宿っていた。蚊かの群がわんわんうなつて二人に襲いかかった。仁右衛門は死体を背負つたまま、小さな墓標や石塔の立たち列ちらなつた間の空地に穴を掘りだした。鍬の土に喰い込む音だけが景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだままで時々頬ほおに来る蚊をたたき殺しながら泣いていた。三尺ほどの穴を掘り終ると仁右衛門は鍬の手を休めて額の汗を手の甲で押拭おしぬぐつた。夏の夜は静かだった。その時突然恐ろしい考が彼れの吐胸とむねを突いて浮んだ。彼れはその考に自分ながら驚いたように呆あきれて眼を見張っていたが、やがて大声を立てて頑童がんどうの如く泣きおめき始めた。その声は醜く物凄ものすこかった。妻はきよつとんとして、顔中を涙にしなから恐ろしげに良人おととを見守つた。

「笠井の四国猿めが、嬰子にが事殺しただ。殺しただあ」

彼れは醜い泣声の中からそう叫んだ。

翌日彼れはまた亜麻の束を馬力に積もうとした。そこには華手はでなモスリンの端切はぎれが乱雲の中に現われた虹にじのようにしつとり朝露にしめつたまま穢きたない馬力の上にしまい忘れ

ていた。

(六)

狂暴な仁右衛門は赤坊を亡くしてから手がつけられないほど狂暴になった。その狂暴を募らせるように烈しい盛夏が来た。春先きの長雨を償うように雨は一滴も降らなかつた。秋に収穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に変わった。自然に抵抗し切れない失望の聲が、黙りこくつた農夫の姿から叫ばれた。

一刻の暇もない農繁の真最中に馬市が市街地に立つた。普段ならば人々は見向きもしないのだが、畑作をなげてしまつた農夫らは、捨鉢な気分になつて、馬の売買にでも多少の儲を見ようとしたから、前景気は思いの外強かつた。当日には近村からさえ見物が来たほど賑わつた。丁度農場事務所裏の空地に仮小屋が建てられて、爪まで磨き上げられた耕馬が三十頭近く集まつた。その中で仁右衛門の出した馬は殊に人の眼を牽いた。

その翌日には競馬があつた。場主までわざわざ函館からやつて来た。屋台店や見世物小屋がかかつて、祭礼に通有な香のむしむしする間を着飾つた娘たちが、刺戟の強い色

振りま
振播いて歩いた。

競馬場の埒らちの周囲は人垣で埋った。三、四軒の農場の主人たちは決勝点の所に一段高く
 棧敷さじきをしつらえてそこから見物した。松川場主の側には子供に付添って笠井の娘が坐つて
 いた。その娘は二、三年前から函館に出て松川の家あかぬに奉公していたのだ。父に似てほそおも細
 面ての彼女は函館の生活に磨きをかけられて、この辺では際立って垢抜けがしていた。競
 馬に加わる若い者はその妙齡な娘の前で手柄を見せようと争った。他人の妾ひとめかけに目星をつけ
 て何になると皮肉をいうものもあつた。

何しろ競馬は非常な景気だつた。勝負がつく度に揚る喝かつさい采の声は乾いた空気を伝わつ
 て、人々を家の内にじつとさしては置かなかつた。

仁右衛門はその頃博奕ばくちに耽ふけつていた。始めの中うちはわざと負けて見せる博徒の手段に甘うまう
 々と乗せられて、勢い込んだのが失敗の基もとで、深入りするほど損をしたが、損をするほ
 ど深入りしないではいられなかつた。亜麻の収利は疾とつの昔にけし飛んでいた。それでも馬
 は金輪際こんりんざい売いる気がなかつた。剩あます所は燕からすむぎ麦あまがあるだけだつたが、これは播種たねまき時ときか
 ら事務所と契約して、事務所から一手に陸軍糧りようまつしやう秣ま廠ちやうに納める事になっていた。その
 方が競争して商人に売いるのよりも割がよかつたのだ。商人どもはこのボイコットを如何どうし

て見過してしよう。彼らは農家の戸別訪問をして糧秣廠よりも遙かに高価に引受けると勧誘した。糧秣廠から買入代金が下つてもそれは一応事務所にとまって下るのだ。その中から小作料だけを差引いて小作人に渡すのだから、農場としては小作料を回収する上にこれほど便利な事はない。小作料を払うまいと決心している仁右衛門は馬鹿な話だと思った。彼れは腹をきめた。そして競馬のために人の注意がおろそかになった機会を見すまして、商人と結托して、事務所へ廻わすべき燕麦をどンドン商人に渡してしまった。

仁右衛門はこの取引をすましてから競馬場にやって来た。彼れは自分の馬で競走に加わるはずになっていたからだ。彼れは裸乗りの名人だった。

自分の番が来ると彼れは鞍も置かずに自分の馬に乗って出て行つた。人々はその馬を見ると敬意を払うように互にうなずき合つて今年の糶では一番物だと賞め合つた。仁右衛門はそういう私語を聞くといい気持ちになつて、いやでも勝つて見せるぞと思つた。六頭の馬がスタートに近づいた。さつと旗が降りた時仁右衛門はわざと出おくれた。彼れは外の馬の跡から内埒へ内埒へとよつて、少し手綱を引きしめるようにして駈けさせた。ほつた彼の顔から耳にかけて埃を含んだ風が息気のみまるほどふきかかるのを彼れは快く思つた。やがて馬場を八分目ほど廻つた頃を計つて手綱をゆるめると馬は思い存分頸を延ば

してずんずんおくれた馬から抜き出した。彼れが鞭むちとあおりで馬を責めながら最初から目星をつけていた先頭の馬に追いせまった時には決勝点が近かった。彼れはいらだつてびしびしと鞭をくれた。始めは自分の馬の鼻が相手の馬の尻とすれすれになつていたが、やがて一步一步二頭の距離は縮まった。狂気のような喚呼かんこが夢中になつた彼れの耳にも明かに響ひびいて来た。もう一息と彼れは思った。——その時突然さじき棧敷の下で遊んでいた松川場主の子供がよたよたと埒らちの中へ這入はいつた。それを見た笠井の娘は我れを忘れて駈け込んだ。

「危ねえ」——観衆は一度に固唾かたずを飲んだ。その時先頭にいた馬は娘の華手はでな着物に驚いたのか、さつときれて仁右衛門の馬の前に出た。と思う暇もなく仁右衛門は空中に飛び上つて、やがて敲たたきつけられるように地面に転がつていた。彼れは氣き丈じょうにも転がりながらすつくと起き上つた。直ぐ彼れの馬の所に飛んで行つた。馬はまだ起きていなかった。後あ趾とあしで反動を取つて起きそうにしては、前脚を折つて倒れてしまった。訓練のない見物人は潮うしおのように仁右衛門と馬とのまわりに押寄せた。

仁右衛門の馬は前脚を二足とも折つてしまつていた。仁右衛門は惘然ぼんやりしたまま、不思議ふし相ぎな顔をして押寄せた人波を見守つて立つてゐる外ほかはなかつた。

獣医の心得もある蹄鉄屋ていてつやの顔を群集の中に見出してようやく正気に返つた仁右衛門は、

馬の始末を頼んですぐごと競馬場を出た。彼れは自分で何が何だかちつとも分らなかつた。彼れは夢遊病者のように人の間を押分けて歩いて行つた。事務所の角まで来ると何と何と事なしにいきなり路の小石を二つ三つ掴んで入口の硝子戸にたたきつけた。三枚ほどの硝子は微塵にくだけて飛び散つた。彼れはその音を聞いた。それはしかし耳を押えて聞くように遠くの方で聞こえた。彼れは悠々としてまたそこを歩み去つた。

彼れが気がついた時には、何方をどう歩いたのか、昆布岳の下を流れるシリベシ河の河岸の丸石に腰かけてぼんやり河面を眺めていた。彼れの眼の前を透明な水が跡から跡から同じような渦紋を描いては消し描いては消して流れていた。彼れはじつとその戯れを見詰めながら、遠い過去の記憶でも追うように今日の出来事を頭の中で思い浮べていた。凡ての事が他人事のように順序よく手に取るように記憶に甦つた。しかし自分が放り出される所まで来ると記憶の糸はぷつぷつ切れてしまった。彼れはその所を幾度も無関心に繰返した。笠井の娘——笠井の娘——笠井の娘がどうしたんだ——彼れは自問自答した。段々眼がかすんで来た。笠井の娘……笠井……笠井だな馬を片輪にしたのは。そう考えても笠井は彼れに全く関係のない人間のようなようだった。その名は彼れの感情を少しも動かす力にはならなかつた。彼れはそうしたまままで深い眠りに落ちてしまった。

彼れは夜中になつてからひよつくり小屋に歸つて来た。入口からぷんと石炭酸の香がした。それを嗅ぐと彼れは始めて正氣に返つて改めて自分の小屋を物珍らしげに眺めた。そうなると彼れは夢からさめるようにつまらない現実に歸つた。鈍つた意識の反動として細かい事にも鋭く神経が働き出した。石炭酸の香は何よりも先ず死んだ赤坊を彼れに思い出さした。もし妻に怪我でもあつたのではなかつたか——彼れは炉の消えて真闇な小屋の中を手さぐりで妻を尋ねた。眼をさまして起きかえつた妻の氣配がした。

「今頃まで何所さいただ。馬は村の衆が連れて歸つたに。傷しい事べおつびろげてはあ」妻は眠つていなかつたようなはつきりした声でこういつた。彼れは闇に慣れて来た眼で小屋の片隅をすかして見た。馬は前脚に重味がかからないように、腹に蓆をあてがうて胸の所を梁からつるしてあつた。両方の膝頭は白い切れで巻いてあつた。その白色が凡て黒い中にはつきりと仁右衛門の眼に映つた。石炭酸の香はそこから漂つて来るのだつた。彼れは火の氣のない囲炉裡の前に、草鞋ばきで頭を垂れたまま安座をかけた。馬もこそつとも音をさせずに黙つていた。蚊のなく声だけが空氣のささやきのようにかすかに聞こえていた。仁右衛門は膝頭で腕を組み合せて、寝ようとはしなかつた。馬と彼れは互に憐れむように見えた。

しかし翌日になると彼れはまたこの打撃から跳ね返っていた。彼れは前の通りな狂暴な彼れになつていた。彼れはプラオを売つて金に代えた。雑穀屋からは、燕からすむぎ麦が売れた時事務所から直接に代価を支払うようにするからといって、麦や大豆の前借りをした。そして馬力を頼んでそれを自分の小屋に運ばして置いて、賭場とばに出かけた。

競馬の日の晩に村では一大事が起つた。その晩おそくまで笠井の娘は松川の所に歸つて来なかつた。こんな晩に若い男女が畑の奥や森の中に姿を隠すのは珍らしい事でもないの
で初めの中うちは打捨てておいたが、余りおそくなるので、笠井の小屋を尋ねさすとそこにも
いなかつた。笠井は驚いて飛んで来た。しかし広い山野をどう探しようもなかつた。夜の
あけあけに大搜索が行われた。娘は河かわ添ぞいの窪地くぼちの林の中に失神して倒れていた。正氣づ
いてから聞きただすと、大きな男が無理やりに娘をそこに連れて行つて残ざんぎやく虐を極めた
辱ははすかしめかたをしたのだと判わかつた。笠井は広岡の名をいってしたり顔に小首を傾けた。事
務所の硝子ガラスを広岡がこわすのを見たという者が出て来た。

犯人の搜索は極めて秘密に、同時にこんな田舎いなかにしては嚴重に行われた。場主の松川は
少からざる懸賞までした。しかし手がかりは皆かしもく目つかなかつた。疑いは妙に広岡の方に
かかつて行つた。赤坊を殺したのは笠井だと広岡の始終いうのは誰でも知っていた。広岡

の馬を躓つまずかしたのは間接ながら笠井の娘の仕業しわざだった。蹄鉄屋が馬を広岡の所に連れて行ったのは夜の十時頃だったが広岡は小屋にいなかった。その晩広岡を村で見かけたものは一人もなかった。賭場にさえいなかった。仁右衛門に不利益な色々な事情は色々に数え上げられたが、具体的な証拠は少しも上らないで夏がくれた。

秋の収穫時になるとまた雨が来た。乾燥が出来ないために、折角みの実つたものまで腐る始末だった。小作はわやわやと事務所に集つて小作料割引の歎願をしたが無益だった。彼らは案あんじょうの定燕麦うりあげ売揚代金の中から厳密に小作料を控除された。来春の種子たねは愚か、冬の間を支える食料も満足に得られない農夫が沢山出来た。

その間にあつて仁右衛門だけは燕麦の事で事務所に破約したばかりでなく、一文の小作料も納めなかった。綺麗に納めなかった。始めの間帳場はなだめつすかしつして幾らかでも納めさせようとしたが、如何どうしても応じないので、財産を差押えると威脅おどかした。仁右衛門は平気だった。押えようといつて何を押えようぞ、小屋の代金もまだ事務所に納めてはなかった。彼れはそれを知りぬいていた。事務所からは最後の手段として多少の損はしても退場さすと迫つて来た。しかし彼れは頑がんとして動かなかつた。ペテンにかけられた雑穀屋をはじめ諸商人は貸金の元金は愚か利子さえ出させる事が出来なかつた。

(七)

「まだか」、この名は村中に恐怖を播まいた。彼れの顔を出す所には人々は姿を隠した。川森とうむかしさえ疾の昔に仁右衛門の保証を取消して、仁右衛門に退場を迫る人となっていた。市街地でも農場内でも彼れに融通をしようというものは一人もなくなった。佐藤の夫婦は幾度も事務所に行つて早く広岡を退場させてくれなければ自分たちが退場すると申出た。駐在巡查すら広岡の事件に關係する事を体ていよく避けた。笠井の娘を犯したものは——何らの証拠がないにもかかわらず——仁右衛門に相違ないときまつてしまった。凡すべて村の中で起つたかがわしい出来事は一つ残らず仁右衛門になすりつけられた。

仁右衛門は押太おしぶとく腹を据えた。彼れは自分の夢をまだ取消そうとはしなかつた。彼れの後悔しているものは博奕ばくちだけだつた。来年からそれにさえ手を出さなければ、そして今年同様に働いて今年同様の手段を取りさえすれば、三、四年の間に一かど纏まとまつた金を作るのは何でもないと思つた。いまに見かえしてくれるから——そう思つて彼れは冬を迎えた。

しかし考えて見ると色々な困難が彼れの前には横よこたわつていた。食料は一冬事かかぬだけはあつても、金は哀れなほどより貯えがなかった。馬は競馬以来廃物になっていた。冬の間稼かせぎに出れば、その留守に気の弱い妻が小屋から追立てを喰うのは知れ切つていた。といつて小屋に居残れば居食いじいをしている外ほかはないのだ。来年の種子たねさえ工面のしようないのは今から知れ切つていた。

焚火たきびにあたつて、きかなくなつた馬の前脚をじつと見つめながらも考えこんだまま暮すような日が幾日も続いた。

佐藤をはじめ彼れの軽蔑けいべつし切つている場内の小作者どもは、おめおめと小作料しほりを搾取とられ、商人に重い前借をしているにもかかわらず、とにかくさした屈托くつたくもしないで冬を迎えていた。相当の雪囲いの出来ないような小屋は一つもなかった。貧しいなりに集つて酒も飲み合えば、助け合いもした。仁右衛門には人間がよつてたかつて彼れ一人を敵にまわしているように見えた。

冬は遠慮なく進んで行つた。見渡す大空が先ず雪に埋められたように何所どこから何所まで真白になつた。そこから雪は滾こんこん々としてとめ度なく降つて来た。人間の哀れな敗残の跡を物語る畑も、勝ちほこつた自然の領土である森林も等しなみに雪の下に埋れて行つた。

一夜の中に一尺も二尺も積り重なる日があつた。小屋と木立だけが空と地との間にあつて汚ない斑点しみだつた。

仁右衛門はある日膝まで這入る雪の中をこいで事務所に出かけて行つた。いくらでもいから馬を買つてくれると頼んで見た。帳場はあざ笑つて脚の立たない馬は、金を喰う機械見たいなものだといつた。そして竹篋しつべがえ返しに跡あと釜がまが出来たから小屋を立退けと逼つた。愚図愚図していると今までのような煮え切らない事はして置かない、この村の巡査でまにあわなければ俱知安くつちやんからでも頼んで処分するからそう思えともいつた。仁右衛門は帳場に物をいわれると妙に向腹むかつばらが立つた。鼻をあかしてくれるから見ておれといひ捨てて小屋に帰つた。

金を喰う機械——それに違いなかつた。仁右衛門は不愜ふびんさから今まで馬を生かして置いたのを後悔した。彼れは雪の中に馬を引張り出した。老いぼれたようになった馬はなつかしげに主人の手に鼻先きを持つて行つた。仁右衛門は右手に隠して持つていた斧おので眉間みけんを喰らわそうと思つていたが、どうしてもそれが出来なかつた。彼れはまた馬を牽ひいて小屋に帰つた。

その翌日彼れは身仕度をして函館はこだてに出懸けた。彼れは場主と一喧嘩ひとけんかして笠井の仕遂しおお

せなかつた小作料の軽減を實行させ、自分も農場にいつづき、小作者の感情をも柔らげて少しは自分を居心地よくしようと思つたのだ。彼れは汽車の中で自分のいい分を十分に考えようとしたり。しかし列車の中の沢山の人の顔はもう彼れの心を不安にした。彼れは敵意をふくんだ眼で一人一人睨めつけた。

函館の停車場に着くと彼はもうその建物の宏大もないのに胆をつぶしてしまつた。不恰好な二階建ての板家に過ぎないのだけれども、その一本の柱にも彼れは驚くべき費用を想像した。彼れはまた雪のかきのけてある広い往來を見て驚いた。しかし彼れの誇りはそんな事に敗けてはいまいとした。動ともするとおびえて胸の中ですくみそうになる心を励まし励まし彼れは巨人のように威丈高にのそりのそりと道を歩いた。人々は振返つて自然から今切り取つたばかりのようなこの男を見送つた。

やがて彼れは松川の屋敷に這入つて行つた。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならないほどちがつた宏大な邸宅だつた。敷台を上る時に、彼れはつまごを脱いでから、我れにもなく手拭を腰から抜いて足の裏を綺麗に押拭つた。澄んだ水の表面の外に、自然には決してない滑らかに光つた板の間の上を、彼れは気味の悪い冷たさを感じながら、奥に案内されて行つた。美しく着飾つた女中が主人の部屋の襖をあけると、息氣のつまる

ような強烈な不快な匂が彼れの鼻を強く襲った。そして部屋の中は夏のように暑かった。

板よりも固い畳の上には所々に獣の皮が敷きつめられていて、障子しょうじに近い大きな白熊の毛皮の上の盛上るような座蒲団ざぶたんの上に、はったんの襜褕どてらを着こんだ場主が、大火鉢おおひばちに手をかざして安座あぐらをかいていた。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨にらみつけた眼をそのまま床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼ひとめでどやし付けられて這入る事も得せずしりぞに逡しりぞみしていると、場主の眼がまた床の間からこつちに帰って来そうになった。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上にちやつちやつと音をさせながら場主の鼻先きまでのそのそ歩いて行って、出来るだけ小さく窮屈きうくつそうに坐りこんだ。

「何しに来た」

底力のある声にもう一度どやし付けられて、仁右衛門は思わず顔を挙げた。場主は真黒な大きな巻煙草のようなものを口に銜くわえて青い煙をほがらかに吹いていた。そこからは氣息いきづまるような不快な匂が彼れの鼻の奥をつんつん刺戟しげきした。

「小作料の一文も納めないで、どの面下つらげて来臭きくきった。来年からは魂を入れかえろ。そして辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿」

そして部屋をゆるするような高笑たかわらいが聞こえた。仁右衛門が自分でも分らない事を寢言のようにいうのを、始めの間は聞き直したり、補ったりしていたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたという風にこう怒鳴どなったのだ。仁右衛門は高笑いの一とくぎりごとに、たたかれるように頭をすくめていたが、辞儀もせずに夢中で立上った。彼れの顔は部屋の暑さのためと、のぼせ上ったために湯気を出さんばかり赤くなっていた。

仁右衛門はすっかり打擗うちくたかれて自分の小さな小屋に帰った。彼れには農場の空の上までも地主の頑丈がんじょうそうな大きな手が広がっているように思えた。雪を含んだ雲は氣息いき苦しいまでに彼れの頭を押えつけた。「馬鹿」その声は動やともすると彼れの耳の中で怒鳴られた。何んという暮しの違いだ。何んという人間の違いだ。親方が人間なら俺おれは人間じやない。俺れが人間なら親方は人間じやない。彼れはそう思った。そして唯ただ呆あきれて黙って考えこんでしまった。

粗朶そだがぶしぶしと燻いぶるその向座むこうざには、妻が襪ぼろにつつまれて、髪をぼうぼうと乱したまま、愚かな眼と口とを節孔ふしあなのように開け放してほんやり坐っていた。しんしんと雪はとめ度なく降り出して来た。妻の膝ひざの上には赤坊もいなかった。

その晩から天気は激変して吹雪ふぶきになった。翌あくるあさ朝仁右衛門が眼をさますと、吹き込ん

だ雪が足から腰にかけて薄ら積つていた。鋭い口笛のようならを立てて吹きまく風は、小屋をめきりめきりとゆすぶりに立てた。風が小風ぐと滅入るような静かさが囲炉裡まで逼つて来た。

仁右衛門は朝から酒を欲したけれども一滴もありようはなかつた。寝起きから妙に思い入っているようだった彼れは、何かのきっかけに勢よく立ち上つて、斧を取上げた。そして馬の前に立つた。馬はなつかしげに鼻先きをつき出した。仁右衛門は無表情な顔をして口をもごもごさせながら馬の眼と眼との間をおとなく撫でていたが、いきなり体を浮かすように後ろに反らして斧を振り上げたと思うと、力まかせにその眉間に打ちこんだ。うとましい音が彼れの腹に伝えて、馬は声も立てずに前膝をついて横倒しにどうと倒れた。痙攣的に後脚で蹴るようなまねをして、潤みを持った眼は可憐にも何かを見詰めていた。「やれ怖い事するでねえ、傷ましいまあ」

すすぎ物をしていた妻は、振返つてこの様を見ると、恐ろしい眼付きをしておびえるように立上りながらこういつた。

「黙れつてば。物いうと汝れもたたき殺されつぞ」

仁右衛門は殺人者が生き残つた者を脅かすような低い皺枯れた声でたしなめた。

嵐が急にやんだように二人の心にはかーんとした沈黙が襲つて来た。仁右衛門はだらんと下げた右手に斧をぶらさげたまま、妻は雑巾ぞうきんのように汚い布巾ふきんを胸の所に押しあてたまま、憚はばかるように顔を見合せて突立つていた。

「ここへ来う」

やがて仁右衛門は呻うめくように斧を一寸動かして妻を呼んだ。

彼れは妻に手伝わせて馬の皮を剥はぎ始めた。生臭い匂が小屋一杯になった。厚い舌をだらりと横に出した顔だけの皮を残して、馬はやがて裸はだかみ身にされて藁わらの上に堅よこたくなって横よこたわつた。白い臄すじと赤い肉とが無気味な縞しまとなつてそこに曝さらされた。仁右衛門は皮を棒のように巻いて藁わら縄でしぼり上げた。

それから仁右衛門のいうままに妻は小屋の中を片付けはじめた。背負えるだけは雑穀も荷造りして大小二つの荷が出来た。妻は良人おとこの心持ちが分るとまた長い苦しい漂浪の生活を思いやつておろおろと泣かんばかりになったが、夫の荒立つた気分を怖れて涙を飲みこみ飲みこみした。仁右衛門は小屋の真中に突立つて隅すみから隅まで目測でもするように見廻した。二人は黙つたままですまごをはいた。妻が風呂敷を被かぶつて荷を背負うと仁右衛門は後ろから助け起してやつた。妻はどうとう身を震わして泣き出した。意外にも仁右衛門は

叱りつけなかった。そして自分は大きな荷を軽々と背負い上げてその上に馬の皮を乗せた。二人は言い合せたようにもう一度小屋を見廻した。

小屋の戸を開けると顔向けも出来ないほど雪が吹き込んだ。荷を背負って重くなった二人の体はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まった。

仁右衛門は一旦戸外そとに出てから待てと行って引返して来た。荷物を背負ったままで、彼は藁繩の片つ方の端を囲炉裡にくべ、もう一つの端を壁際にもって行ってその上に細くこまか刻んだ馬糧の藁をふりかけた。

天も地も一つになった。颯さつと風が吹きおろしたと思うと、積雪は自分の方から舞い上るように舞上った。それが横なぐりに靡なびいて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまわりの木立は見えたり隠れたりした。風に向った二人の半身は忽ちたちま白く染まって、細かい針で絶間なく刺すような刺戟しげきは二人の顔を真赤にして感覚を失わしめた。二人は睫毛まつげに氷りつく雪を打振り打振り雪の中をこいだ。

国道に出ると雪道がついていた。踏み堅められない深みに落ちないように仁右衛門は先きに立って瀬踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負った二人の姿はまるびがちに少しずつ動いて行った。共同墓地の下を通る時、妻は手を合せてそつちを拝みながら歩いた――

わざとらしいほど高い声を挙げて泣きながら。二人がこの村に這入った時は一頭の馬も持っていた。一人の赤坊もいた。二人はそれらのものすら自然から奪い去られてしまったのだ。

その辺から人家は絶えた。吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややともすると投槍のように襲つて来た。吹きまく風にもまれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂った。二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しずつ俱知安の方に動いて行つた。

とどまつたい
榎松帯が向うに見えた。凡ての樹が裸かになつた中に、この樹だけは幽鬱な暗緑の葉色をあらためなかつた。真直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のような風の音を籠めていた。二人の男女は蟻のように小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまつた。

(一九一七、六、一三、鶏鳴を聞きつつ 摺筆)

青空文庫情報

底本：「カインの末裔 クララの出家」岩波文庫、岩波書店

1940（昭和15）年9月10日第1刷発行

1980（昭和55）年5月16日第25刷改版発行

1990（平成2）年4月15日第35刷発行

底本の親本：「有島武郎著作集 第三輯」新潮社

1918（大正7）年2月刊

初出：「新小説」

1917（大正6）年7月号

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

2000年3月4日公開

2005年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カインの末裔

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>